譯詩集に寄せて[[1]](#footnote-1)

朝鮮はもともと藝術の國でありました。古い歴史に據りますと朝鮮の人は歌をうたつて踊るのが好きであり、音樂も好きでありました。唐にも高麗樂が國樂の一部を占め、日本でも高麗樂が右房の樂でありました。日本で歌が國の道であつた如く、新羅や百濟や高句麗もさうでありましたし、高麗もさうでありました。ところが李朝朝鮮になつてから支那の文化に心酔したあまり、凡ての國の道は廃れて了ひました。

　今より約三十年前、朝鮮人は自分の言葉で歌を詠んだり小説を書いたりすることを始めました。併合以来、教育が普及されるに及んで、この新らしい文學が榮える様になりました。新らしい詩もかうして生まれたのでした。

　從つて、朝鮮の新らしい詩は謂はゞほんの發生期で、まだまだ大なる収穫があつたとは申されませぬ。しかし、若いながらに詩は詩であります。若い朝鮮の魂の聲たるに相違はありませぬ。

　金素雲氏は曾て朝鮮の民謡を蒐め、幾冊かの譯本を公にされました。それは實に素晴らしい飜譯ぶりで、江湖の稱讚を博したことであります。金氏はその筆で新たにまた朝鮮の新詩百篇ほどを移譯されました。原文のリズムや匂ひにまで心を配られたと聞いてゐます。實に金氏は詩人たると同時に、原語譯語兩つ乍らマザートングと云ふべき堪能さを有して居り、若し詩が譯し得られるものとしましたらこの人以上の譯者はあり得ないと信じます。

　今や、大和民族と朝鮮民族とは一つとなつて日本帝國を護る運命に結びつけられて居ります。その爲にはお互いに魂と魂が觸れ合うことが必要であります。この役割をなすもの文學を措いて他に何がありませう、文學こそは兩民族の心と魂とを結びつけ融け合せる最も力ある要因と信じます。この譯詩集の意義も茲にあるものと思はれます。

　舊友たる譯者から何か書けと命ぜられましたので、喜んで一言申上げた次第であります。

　　　昭和十五年一月、　京城にて　　　　　　　　　　　　　　李光洙

1. 昭和15年5月25日に河出書房から発行された金素雲の訳詩集『乳色の雲』に寄せたものである。 [↑](#footnote-ref-1)